

母島産ムラサキシキブ属の新種記載

【代表者】須貝 杏子 島根大学 生物資源科学部 助教

【研究の目的と内容】

小笠原産ムラサキシキブ属は小笠原諸島における適応放散の代表例であり、これまでに3種(オオバシマムサラキ、シマムラサキ、ウラジロコムラサキ)が認識されていた。これら3種はいずれも父島列島に分布し、互いに異なる環境に生育している。その一方で、父島列島以外にはオオバシマムサラキのみが分布する。しかしながら、オオバシマムサラキの種内には大きな形態変異があることが以前から指摘されていた(Kawakubo 1986)。小笠原諸島でムラサキシキブ属は主要構成樹種の1つであり、在来生態系の再生において、植栽対象種になっている。また、外来種の影響を受けて、個体数が減少している集団も多い。保全事業を進めていく上で、その対象を明確にすることが必要であり、小笠原産ムラサキシキブ属の分類の見直しを行うことが求められている。

これまでに、SSR解析により、母島列島のオオバシマムサラキの種内には、父島列島の3種間に匹敵する高い遺伝的分化があることを報告した。また、母島内で開花期のずれがあることを明らかにした(Sugai *et al.* 2019)。次に、母島内を網羅的に調査することで、4つのタイプに分かれることと、各タイプの分布を明らかにした。また、4タイプの形態的特徴と開花期も調べた(Setsuko *et al.* 2023a)。さらに、解像度がより高いRAD-seq解析により、小笠原産ムラサキシキブ属(父島列島の3種と母島列島の4タイプなど)の系統解析や集団動態解析を行った(Setsuko *et al.* 2023b)。ここまでの研究で、母島の4タイプの内、3つは新種として記載できると判断した。そこで、小笠原諸島母島産ムラサキシキブ属において、新たに識別された3つのタイプを新種記載することを本研究の目的とした。

現地母島の共同研究者より、タイプ標本とする押し葉標本と花の液浸標本を送付してもらい、形態計測を行った。その情報を元に、記載文 description(種の特徴を記述する文)と判別文 diagnosis(他種との区別を記述する文)を作成した。また、11月末に東京都立大学牧野標本館を訪問し、小笠原諸島で採取されたムラサキシキブ属の標本約480点を調査した。記載論文に必要な標本ラベルの情報を取得した。タイプ標本を含む30点の押し葉標本を牧野標本館(MAK)と東京大学植物標本室(TI)に収めた。

<引用文献> Kawakubo N 1986. *Plant Species Biol* 1: 59-68. Sugai K *et al.* 2019. *J Plant Res* 132: 759-775. Setsuko S *et al.* 2023a. Research Square. Setsuko S *et al.* 2023b. *Authorea*.

【研究の成果(本研究によって得られた知見、成果、論文、学会発表、外部資金への応募見込み等)】

タイプ標本とする押し葉標本と花の液浸標本を元に、記載文と判別文を作成した。開花期が6~8月と早い *Callicarpa* × *chibusensis* は、今回の研究期間に花の液浸標本を得られなかったため、来年度に持ち越したが、他の部分については、記載文を完成させた。

東京都立大学牧野標本館での標本庫調査により、小笠原諸島で採取されたムラサキシキブ属の標本約480点を調査し、123点にアノテーションラベルを付けた。標本ラベルの情報を取得し、115点をパラタイプとして記載論文に載せた。タイプ標本を含む27点を牧野標本館(MAK)に収めた(MAK472470~MAK472496)。シンタイプ3点については、東京大学植物標本室(TI)に収めた(TI00265244~TI00265246)。

作成した記載論文は、来年度に持ち越しとなっている *Callicarpa* × *chibusensis* の花の形態を記述する数行を除いて完成したため、英文校正に出し、仕上げている。来年度の始めに花を入手でき次第、記載論文を完成させ、*Acta Phytotaxonomica et Geobotanica* に投稿する予定である。



記載する小笠原諸島母島列島の新しい3分類群. (左)オガサワラムラサキ *Callicarpa boninensis*, (中)ハハジマムラサキ *C. hahajimensis*, (右)チブサンナムラサキ *C. × chibusensis*.